

キャリア意識がウェルビーイングにもたらす影響

—修学意欲の向上に向けた検討—

横島 三和子,*† 信藤 佳奈,** フィールデン(野呂)育未,* 土肥 茂幸*

目的：中学生及び大学生という異なる職業的発達段階に着目し、将来に対する目標設定の状況を軸として、キャリア意識と修学意欲の関連を明らかにする。また、そこにウェルビーイングがどのように関係しているかを考察する。

方法：大阪府内の私立中学校に在籍する全校生徒を対象に、令和4年5月に質問紙調査を実施した。また、大阪人間科学大学人間科学部子ども教育学科2022年度入学生を対象に、令和4年と令和5年の5月に質問紙調査を実施した。

結果：中学生の職業的発達課題として挙げられている「自己理解と自己有用感の獲得」や「進路計画の立案と暫定的選択」は、自己評価によって可視化することが重要であり、それが職業的発達に影響を及ぼすことになる。また、大学生の調査結果から、評価活動が有効に働くことによって自己有用感が高まり、キャリア意識や修学意欲に影響を与えることが明らかになった。

結論：キャリア意識が高ければウェルビーイングが高まるという単純な構造ではなく、様々な要素が関連し合う構造になっている。また、学習者自身が目指す免許・資格に関する科目単体での学びで終わらせるのではなく、それぞれの科目における学びに関連性を持たせることや自身の学び・成長を正確に評価できる機会があることがより確かなキャリア意識の形成につながることを示唆された。これからも本調査を継続し、キャリア意識や修学意欲を高めるための支援や授業内容・方法の改善・再構築を図り、学生のウェルビーイングの向上に寄与していきたい。

キーワード：ウェルビーイング、キャリア意識、修学意欲、追跡調査、評価

(2023年10月19日受付け、2023年12月8日受理)

はじめに

現在、国際的にウェルビーイングの考え方が注目されている。経済協力開発機構（OECD）がまとめた『PISA2015年調査国際報告書（Volume III）』では、生徒のウェルビーイング（Well-being）を「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働き（functioning）と潜在能力（capabilities）である」と定義していることがOECD生徒の学習到達度調査PISA2015年調査『生徒のwell-being（生徒の「健やかさ・幸福度」）』報告書で示された¹⁾。『令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）』

（2021）では、2019年5月にOECDが発表した“Learning Compass 2030（学びの羅針盤2030）”の中で「子供たちがウェルビーイングを実現していくために自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性が指摘されている」ことを取り上げている²⁾。また、『次期教育振興基本計画について（答申）』（2023）において、「経済先進諸国においては、経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさや健康までを含めて幸福や生きがいを感じる「ウェルビーイング」の考え方が重視されている」とし、「多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるこ

*大阪人間科学大学 人間科学部 子ども教育学科

**大阪人間科学大学 学生課 学生支援センター

*†責任著者：〒566-8501 大阪府摂津市正雀1-4-1、大阪人間科学大学 人間科学部 子ども教育学科

E-mail：m-yokojima@kun.ohs.ac.jp

と」がウェルビーイングの実現であり、教育を通じて日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図っていくことが求められていると述べられている³⁾。

中央教育審議会『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』（2011）において、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている⁴⁾。キャリア教育・職業教育では、発達の過程にある子どもたちがそれぞれの段階に応じて自己と進路・職業との「関係付け」を行い、職業的（進路）発達を遂げていくことができるよう、指導・援助していくことが大切とされている。

国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・労働観を育む教育の推進について（調査研究報告書）』（2002）において、「子どもの発達」という観点から、学校段階別にみた職業的（進路）発達段階、職業的（進路）発達課題が示されている（表1）⁵⁾。小学校は、進路や職業に対する意識を育成するための基礎を形成する段階であり、「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」や「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」などが職業的発達課題として挙げられている。これに対して、中学校は、「自己理解と自己有用感の獲得」や「興味・関心等に基づく職業観・労働観の形成」等が職業的課題として挙げられている。つまり、小学生から中学生にかけては、自己の形成と理解を軸にして、職業や勤労への関心を高め、夢や希望、憧れを現実のものにするための探索・選択の段階であるといえる。特に中学生は、自己理解や自己有用感を土台として、自分自身がなりたい姿を探索し、目標を見つけ、将来に向けた計画を立て始めることから、キャリア発達の成熟が開始する初期段階であることが分かる。

表1 学校段階別にみた職業的（進路）発達段階、職業的（進路）発達課題

	小学校	中学校	高等学校
職業的（進路）発達段階	進路の探索・選択にかかる基礎形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
職業的（進路）発達課題	<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 	<ul style="list-style-type: none"> 暫定的自己理解と自己有用感の獲得 興味・関心等に基づく職業観・労働観の形成 進路計画の立案と暫定的選択 生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己受容 選択基準としての職業観・労働観の確立 将来設計の立案と社会移行の準備 進路の現実吟味と試行的参加

（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002）

高校生になると、「現実的探索・試行と社会的移行準備の時期」と示されている通り、職業観・労働観の確立に向けて、将来設計を見据えたより具体的で実践的な進路や職業に関する準備を行う段階になるといえる。

本研究におけるキャリア意識とは、職業的（進路）発達に関連する「職業や進路に対する意識」のことをさす。

一方、高等学校までの職業的発達課題の探究を経てきた大学生は、高等教育における広い知識と深い専門性、応用的能力等を身につけ、学問を修めることを目標としている。社会人としての自立に向けて、講義や演習、実習を通して「自分がしたいことが何なのか」を明確にし、ファーストキャリアを選択する段階である。自身のライフスタイルや生きがいについて深く見詰め、職業を選択するためには、キャリア意識を高めつつ、将来起こることへの自信や成長実感を得たり、4年間のプロセスで自身の能力を的確に押し量る経験（自己評価）を重ねたりすることが大切になるのではないかと。そのためには、大学での学びに対する修学意欲が不可欠であり、自身の将来に向けた目標を構築しながら着実に近づいていくことが求められる。一方、学年が上がり専門的内容を学ぶにつれて、自身が目指す職業についての理解が深まると同時に、自分の理想とのギャップに不安や葛藤を抱えてしまう可能性もある。例えば、大学生を対象にした吉村⁶⁾の調査研究では、キャリア意識が未成熟で職業決定に不安や焦りを感じることで、将来に対する夢や目標を持つことができず、自分の生き方に対する自信を持てなくなることを示している。

以上の背景から、キャリア教育は、職業的発達課題に基づき学校段階及び学年等において適切な手立てを講じていくことが必要になることがわかる。児童生徒や学生にとって修学意欲の維持・向上は容易ではなく、修学の先にある自身の姿を描き続け、そこに夢や目標を紐付けていく営み（プロセス）がキャリア意識を育むことにつながり、修学に向かうことができるようになるのではないかと。

そこで本研究では、中学生及び大学生という異なる職業的発達段階に着目し、将来に対する目標設定の状況を軸として、キャリア意識と修学意欲の関連を明らかにする。また、それらと切り離すことのできない「ウェルビーイング」がどのように関係しているかを考察する。

方法

1. 調査対象

①大阪府内の私立K中学校に在籍する1年生～3年生 97名

②大阪人間科学大学人間科学部子ども教育学科2022

年度入学生（2022年度調査時：49名、2023年度調査時：38名）

2. 調査時期

- ①2022年5月
- ②2022年5月及び2023年5月

3. 調査内容と方法

- ①回答者の学年、年齢、性別の基本属性、夢の有無、自身の感じている幸福感について10項目、進路への自己有用感について8項目、職業決定について6項目から構成された自記式質問紙を作成した。これを用いて、中学入学直後及び進級直後に3学年を対象とした調査を実施し、職業的発達段階において現実的探索と暫定的選択の時期といわれる中学生のキャリア意識と修学意欲の関連を明らかにする。
- ②回答者の所属学科、年齢、性別の基本属性、夢の有無、自身の感じている幸福感について12項目、進路への自己有用感について30項目、職業決定について38項目、修学意欲について7項目から構成されたGoogleフォームによるアンケートを作成した。これを用いて、大学入学直後と進級直後に同一集団を対象とした経年比較調査を実施し、キャリア意識と修学意欲の関連を明らかにする。

なお、今回用いた質問紙は、伊藤ら⁷⁾の主観的幸福感尺度に関する研究及び浦上⁸⁾の進路選択に対する自己効力感に関する研究、そして、下山⁹⁾の職業未決定尺度に関する研究を土台として作成したものになる。これらの先行研究は、信藤¹⁰⁾のキャリア意識と主観的幸福感の関連についての研究において大学生を対象としたアンケート調査の指標として活用し、一定の成果を見出すことができた。そこで、本研究においては、中学生及び大学生それぞれの対象に応じて質問項目に表現の微修正等を加えて用いることとした。

4. 倫理的配慮

本研究は、大阪人間科学大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を受けて実施している（承認番号：2021-25）。インフォームドコンセントの手続きとして、調査対象者には、回答前に本調査の趣旨、目的、方法、倫理的配慮、個人情報の取り扱い等について口頭及び書面で説明を行い、回答の提出をもって、研究への同意が得られた。また、調査対象者が所属する中学校長及び大阪人間科学大学人間科学部子ども教育学科長に了承を得て実施した。プライバシーや個人情報の保護に配慮し、個人が特定されることのないよう、情報の扱いには十分留意することについても説明を行った。

結果と考察

1. 中学生のキャリア意識と修学意欲の関連

今回調査を行った私立K中学校は、併設の高等学校との6年間の教育を通して、自立心や将来を見据える力を養い、自分の目標や夢の実現に向けた学力を育成することを「めざす学校像」として掲げている女子校である。自己の「好き」を育て、自分らしさを培うことによって、「夢」に向かっていくための修学意欲を高めることを大切にしている学校である。

(1) 「夢の有無」と「学年」

前述のように、中学生の職業的発達段階は「現実的探索と暫定的選択の時期」にあり、職業や勤労に対する興味・関心が高まり、進路選択への探索が始まることから、「夢」を持つことは学校生活を充実させるための現実的な問題として立ち現れることになる。そこで、学年段階において「夢の有無」が変化するかどうかにについてクロス集計し、その結果を比較したのが表2である。学年別に見ると、「夢がある」と回答した割合は、1年生が75%、2年生が81.0%、3年生の59.1%であった。一方、「夢がない」と回答した割合をみると、1年生は15.6%、2年生は19.0%、3年生は38.6%であった。これらの結果から、中学生になると自己理解が進んでくることで「なりたい自分」に対するイメージが膨らみ、夢や希望といった目標が見えやすくなると考えられる。一方、学年が上がるごとに夢がないと回答した生徒の割合が増えており、特に3年生は1、2年生の2倍以上の数値となっている。進路の現実的探索が本格的な段階になってくると、「夢」は憧れという曖昧なものではなく、現実的にクリアしなければならない目標となり、目の前に立ちだかることになる。この時、自己の現状と目標との差異を突きつけられることが、自己有用感を低下させることも考えられる。これにより、ウェルビーイングを構成する要因の1つである精神的な健康を害することが少なくない。外山ら¹¹⁾は「目標の達成が困難になった時に、目標の内容や水準、方略を調整することなくがむしゃらに目標達成にエネルギーを費やすと、抑うつにつながりやすい」ことを示しており、現実的探索と暫定的選択が開始する中学生にとって、目標に向かうプロセスにおける困難な状況などを乗り越えることは容易ではないといえる。

表2 「夢の有無」と「学年」のクロス集計

学年	夢があるか			合計
	ある	ない	無回答	
1	24(75.0%)	5(15.6%)	3(9.4%)	32
2	17(81.0%)	4(19.0%)	0(0.0%)	21
3	26(59.1%)	17(38.6%)	1(2.3%)	44
合計	67(69.1%)	26(26.8%)	4(4.1%)	97

(2) 「夢の有無」と「将来の準備の進み具合」

「夢」という目標の有無によって「将来の準備の進み具合」に違いがあるかについてクロス集計し、結果を比較したのが表3である。「夢がある」と回答した生徒のうち、将来の準備の進み具合について「とても当てはまる(とても進んでいる)」もしくは「当てはまる(進んでいる)」と回答した生徒は合わせて46.3%であった。一方、「夢がない」と答えた生徒のうち、将来の準備の進み具合について「とても当てはまる(とても進んでいる)」もしくは「当てはまる(進んでいる)」と回答した生徒は合わせてわずか3.9%であった。このことから、夢という目標を持つことができていると、その夢に近づくための具体的な職業を想定し、どのような知識やスキル、資格・免許が求められるのかを調べたり、実際にその勉強をしたり、資格試験を受験したりと、いつまでに何をどのように身につければいいか、どういう経験が自身にとってプラスになるのかを考えられるようになるため、自ずと準備が進むことになる。しかし、夢という目標が定まっていなければ、進路(キャリア)が明瞭にならず、照らし合わせる自身の将来像を見いだせず、どこに向かって何をすればいいのかを考えることが難しくなる。

表3 「夢の有無」と「将来の準備の進み具合」のクロス集計

将来の準備が進んでいるか	夢があるか			合計
	ある	ない	無回答	
とても当てはまる	14 (20.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	14 (14.4%)
当てはまる	17 (25.4%)	1 (3.9%)	1 (25%)	19 (19.6%)
どちらとも言えない	30 (44.8%)	15 (57.7%)	3 (75%)	48 (49.5%)
当てはまらない	5 (7.5%)	5 (19.2%)	0 (0.0%)	10 (10.3%)
全く当てはまらない	1 (1.5%)	5 (19.2%)	0 (0.0%)	6 (6.2%)
合計	67	26	4	97

一方、表3の結果で顕著であったのが、夢がある・なしに関わらず、将来の準備の進み具合が「どちらともいえない」と回答した割合が4～5割いたことである。この要因として考えられるのは、将来の準備の進み具合を自身で適切に評価することは容易ではないということである。夢があることによって目標のレベルは高くなり、夢がないことによって目標そのものが可視化できない、どちらの状況にあっても、現在の姿との差異が見えづらく、評価が働きにくくなる。これにより、進路(キャリア)に向かうための計画やアプローチ、つまり、準備状況の把握がしづらくなっていると推察できる。自身で適切に評価することが難しいのであれば、他者評価や相互評価する機会を設けることで、

自己評価を促すことも考える必要がある。

前野¹²⁾は、幸福に生きる(ウェルビーイング)ためには、①「やってみよう」因子、②「ありがとう」因子、③「なんとかなる」因子、④「ありのままに」因子を誘発することが有効であると述べている。誰しも先の見えない状況(目標の見えづらさ)は不安や焦りを生じさせることになるが、自己理解や自己有用感が未成熟な中学生にとっては、これが大きな壁となり、次の一步を踏み出すことに恐れを抱く場合が少なくない。そこで、前野の4因子は前に進むための後押しとなり、キャリアに向き合う気持ちや学習に対する取り組みに変化を与えることに寄与するのではないか。「夢」に近づくために必要な準備を「やってみよう」と思えることがウェルビーイングの実現につながると考えることができる。

(3) 「進路の暫定的探索」と「毎日の充実感」

「毎日の充実感」が「進路の暫定的探索」とどのように関連しているかを検討するため、クロス集計した結果が表4である。毎日が「とても楽しい」もしくは「まあ楽しい」と回答した生徒のうち、将来やってみいたい仕事について「とても考えている」と回答した割合は78.9%、「考えている」と回答した生徒は86.7%いることがわかった。このことから、日々の充実感があることにより就きたい職業についての探索や選択肢を広げることができ、自身の充実した状態がキャリアに向き合う準備に影響を与えていることがうかがえる。

表4 「進路の暫定的探索」と「毎日の充実感」のクロス集計表

毎日が楽しいか	将来、やってみたい仕事はいくつかあり、それらについていろいろ考えている					合計
	とても当てはまる	当てはまる	どちらとも言えない	当てはまらない	全く当てはまらない	
とてもそう思う	10 (52.6%)	12 (40.0%)	11 (34.4%)	2 (33.3%)	3 (37.5%)	38
まあそう思う	5 (26.3%)	14 (46.7%)	17 (53.1%)	4 (66.7%)	3 (37.5%)	43
あまりそう思わない	2 (10.5%)	3 (10.0%)	2 (6.3%)	0 (0.0%)	2 (25.0%)	9
全くそう思わない	2 (10.5%)	1 (3.3%)	2 (6.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5
合計	19	30	32	6	8	95

(4) 「職業への探究」と「自分らしさ」

「職業への探究」が「自分らしさ」を見つけることとどのように関連しているかを検討するため、クロス集計したのが表5である。職業への探究に「とても自信がある」もしくは「自信がある」と回答した生徒のうち、自分のいいところを見つけることに「とても自信がある」と回答した割合が87.5%、「自信がある」と回答した割合が66.7%であった。このことから、なりたい仕事への探究を続けられる状態にある者は、自分らしさ

への問いに対しても自信を持って向き合えることがわかった。なりたい仕事への探究には、興味のある職業（キャリア）に関する課題意識や情報収集、整理・分析を伴うことになるが、この過程において、自己理解や自己有用感とのつながりを見出しながらターゲットを絞っていくことになる。そこには、「自分らしさ」への問いが表出されるとともに、目標に向かうための計画やアプローチの検討も行われることになる。つまり、自己評価によってこれらの可視化が可能となり、それが職業的発達に重要になるといえる。

表5 「職業への探究」と「キャリア意識」のクロス集計

なりたい仕事への探究	自分のいいところを見つけること				合計
	とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	全く自信がない	
とても自信がある	7 (87.5%)	5 (23.8%)	7 (13.2%)	1 (7.7%)	20
自信がある	0 (0.0%)	9 (42.9%)	17 (32.1%)	4 (30.8%)	30
あまり自信がない	1 (12.5%)	7 (33.3%)	25 (47.2%)	4 (30.8%)	37
全く自信がない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (7.5%)	4 (30.8%)	8
合計	8	21	53	13	95

(5) 中学生を対象とした調査結果の考察

今回対象とした中学生の調査結果から、学年が上がるにつれて進路の暫定的選択に迫られ、夢を持つ生徒が増加するという互恵的な関係ではないことが示唆された。将来の夢という漠然としたものが目標として立ち現れる過程では、暫定的自己理解を土台にしながら自分の姿を捉えようと試行し、生き方や進路に関する現実的探究を通して充実感と葛藤を繰り返しながら自己有用感が獲得されるのではないだろうか。目標を自ら設定し、進路計画を立ててアプローチするためには、「やってみよう」という要因などを誘発することでウェルビーイングの実現につながっていくことを自覚し、自己評価だけでなく他者・相互評価を生かしながら、高等学校の職業的発達課題へ移行していくことが求められる。

2. 大学生のキャリア意識と修学意欲の関連

今回調査を行った大阪人間科学大学人間科学部子ども教育学科は、保育者・教育者を養成する課程を有しており、幼稚園教諭一種免許状及び保育士資格、小学校教諭一種免許状、児童厚生一級指導員資格の取得を希望する学生が在籍している。入学当初から、将来の夢や目標が概ね明確な状態にある学生が少なくないが、恒常的に修学意欲は維持・向上するとは限らないことから、大学生という職業的発達課題を捉えながら、キャリア意識と修学意欲の関連を探っていく。

(1) 将来の目標の決定状況と将来起こることへの自信

学生の「将来の目標の決定状況」が自己有用感につながる「将来起こることへの自信」とどのように関連しているのかを検討するためにクロス集計した結果が表6（2022年度調査の結果）と表7（2023年度調査の結果）である。経年変化について注目すると、目標が決定している学生のうち、将来起こることに対して「非常に自信がある」もしくは「自信がある」と答えた割合が2022年度調査では56.8%であったのに対し、2023年度調査では76.0%に増加した。また、目標が決まっていない学生のうち、将来起こることに対して「あまり自信がない」もしくは「全く自信がない」と答えた割合が2022年度調査では80.0%であったのに対し、2023年度調査では53.8%に減少した。

表6 「将来の目標の決定状況」と「将来起こることへの自信」のクロス集計（2022年度）

将来の目標の決定状況	決定	将来起こることへの自信				合計
		非常に自信がある	ある程度自信がある	あまり自信はない	全く自信はない	
将来の目標の決定状況	決定	3 (6.8%)	22 (50.0%)	15 (34.1%)	4 (9.1%)	44 (89.8%)
	未決定	0 (0.0%)	1 (20.0%)	4 (80.0%)	0 (0.0%)	5 (10.2%)
合計		3 (6.1%)	23 (46.9%)	19 (38.8%)	4 (8.2%)	49 (100.0%)

表7 「将来の目標の決定状況」と「将来起こることへの自信」のクロス集計（2023年度）

将来の目標の決定状況	決定	将来起こることへの自信				合計
		非常に自信がある	ある程度自信がある	あまり自信はない	全く自信はない	
将来の目標の決定状況	決定	4 (16.0%)	15 (60.0%)	5 (20.0%)	1 (4.0%)	25 (65.8%)
	未決定	1 (7.7%)	5 (38.5%)	7 (53.8%)	0 (0.0%)	13 (34.2%)
合計		5 (13.2%)	20 (52.6%)	12 (31.6%)	1 (2.6%)	38 (100.0%)

この結果の背景には、学生たちが1年間、保育・教育に関する専門的な授業を通し、今後の学生生活や自身が目指す保育職・教育職という職業において起こり得るであろう具体的な事柄や姿を学び、保育職や教育者を志す学生であるという自覚の高まりとともに、予想・イメージできるようになってきたことが関連すると推察できる。

具体的には、講義等による専門的な学修のみならず、本学と同法人の幼稚園での預かり保育や摂津市こどもフェスティバルのような地域連携活動等への参加に加え、2022年11月の保育実習や2023年4月の教育実習による学びが影響している。特に、実際に子どもたちと関わる実践経験の積み重ねが、将来の自分をより具体的

にイメージできることにつながっている。このような活動の中で、試行錯誤しながら成功や失敗を経験することで、課題解決や今後の期待といったキャリア意識の具現化に結びついたと考える。

(2) 将来の目標の決定状況とこれまでの成長実感

学生の「将来の目標の決定状況」が「これまでの成長実感」とどのように関連しているのかを検討するために、クロス集計したものが表8（2022年度調査の結果）と表9（2023年度調査の結果）である。目標が決定している学生のうち、「これまでどの程度成長したと感じているか」に対して、「非常にうまくいっている」もしくは「ある程度うまくいっている」と回答した学生の割合が2022年度調査では54.6%であったのに対し、2023年度調査では84.0%に増加した。この点については、この大学に来てよかった、ここで学んでいくことで今後のキャリアも良い方向に導かれるであろうという、まだ漠然とはしているものの自身の進路選択がある程度成功していると感じることができている状態であると推察される。一方、目標が決定していない学生のうち、同様の質問に対して「あまりうまくいっていない」もしくは「全くうまくいっていない」と回答した学生の割合が2022年度調査では40.0%であったのに対し、2023年度調査では46.2%に増加している。この結果から、専門職に対する意識が高まるほど、自己の現状と将来の目標に差が生じていることに気づく機会が増え、成長を実感しづらい状態が起こることも示唆される。

表8 「将来の目標の決定状況」と「これまでの成長実感」のクロス集計（2022年度）

		これまでの成長実感				合計
		非常にうまくいっている	ある程度うまくいっている	あまりうまくいっていない	全くうまくいっていない	
将来の目標の決定状況	決定	1 (2.3%)	23 (52.3%)	18 (40.9%)	2 (4.5%)	44 (89.8%)
	未決定	0 (0.0%)	3 (60.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	5 (10.2%)
合計		1 (2.0%)	26 (53.1%)	20 (40.8%)	2 (4.1%)	49 (100.0%)

表9 「将来の目標の決定状況」と「これまでの成長実感」のクロス集計（2023年度）

		これまでの成長実感				合計
		非常にうまくいっている	ある程度うまくいっている	あまりうまくいっていない	全くうまくいっていない	
将来の目標の決定状況	決定	1 (4.0%)	20 (80.0%)	3 (12.0%)	1 (4.0%)	25 (65.8%)
	未決定	0 (0.0%)	7 (53.8%)	4 (30.8%)	2 (15.4%)	13 (34.2%)
合計		1 (2.6%)	27 (71.1%)	7 (18.4%)	3 (7.9%)	38 (100.0%)

学生が大学での学びに対して成長実感を得られることは、大学へのコミットメントの高まりにも関連してることが考えられる。将来の職業(キャリア)をイメージし、そこに向けて着実に仲間と共に学びを重ねることは、自身の成長を感じることができると共に、大学へのコミットメントを高める効果につながる可能性がある¹³⁾。この点については、2022度と2023度の結果の丁寧な比較等が今後も必要である。

(3) 将来の目標の決定状況と自己評価

学生の「将来の目標の決定状況」が「自分の能力を正確に評価できるか」とどのような関連があるかについて検討するため、クロス集計した結果が表10（2022年度調査の結果）と表11（2023年度調査の結果）である。目標が決定している学生のうち、自分の能力を正確に評価することに「非常に自信がある」もしくは「自信がある」と回答した学生の割合が2022年度は27.3%であったのに対し、2023年度は40.0%に増加した。この結果から、2023年度の方がキャリアに対して自身の能力を正確に推し量る術が身につけていることがわかる。さらに、目標が決定していない学生のうち、自分の能力を正確に評価することに「あまり自信がない」もしくは「全く自信がない」と回答した学生の割合が2022年度では100%であったのに対し、2023年度では61.6%に減少した。このことから、目標が決定していない学生であっても、2022度よりも2023年度の方が自分の能力を正確に評価することができると感じている割合が高くなったことがわかる。つまり、2022年の入学当初から評価活動を継続してきたことによって、2023年度の方が自己課題をみつけるための自己評価活動に対す

表10 「将来の目標の決定状況」と「自分の能力を正確に評価できるか」のクロス集計（2022年度）

		自分の能力を正確に評価できるか				合計
		非常に自信がある	自信がある	あまり自信がない	全く自信がない	
将来の目標の決定状況	決定	3 (6.8%)	9 (20.5%)	30 (68.2%)	2 (4.5%)	44 (89.8%)
	未決定	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (100.0%)	0 (0.0%)	5 (10.2%)
合計		3 (6.1%)	9 (18.4%)	35 (71.4%)	2 (4.1%)	49 (100.0%)

表11 「将来の目標の決定状況」と「自分の能力を正確に評価できるか」のクロス集計（2023年度）

		自分の能力を正確に評価できるか				合計
		非常に自信がある	自信がある	あまり自信がない	全く自信がない	
将来の目標の決定状況	決定	3 (12.0%)	7 (28.0%)	11 (44.0%)	4 (16.0%)	25 (65.8%)
	未決定	0 (0.0%)	5 (38.5%)	6 (46.2%)	2 (15.4%)	13 (34.2%)
合計		3 (7.9%)	12 (31.6%)	17 (44.7%)	6 (15.8%)	38 (100.0%)

る学生の自信が向上したと考えられる。一方で、自己評価の能力が高まったからこそ、適切に自己を捉えることで、目標と現状のギャップが可視化され、それが将来の目標の決定に迷いを生じさせる場合もあることが推察される。また、仮に迷いが生じたとしても、そのことを先送りするのではなく、自己評価によって次なる一步を踏み出す機会を得ることは、結果として迷いの解消を経て目標を決定することにつながるようになる。そのためにも、自己評価だけで終わるのではなく、他者・相互評価による支援をすることで、より自己評価を確かなものにするには、中学校段階と同様に重要といえる。

(4) 大学生を対象とした調査結果の考察

今回対象とした大学生の調査結果から、学年が上がることにつれて将来に対するイメージがより明確になることで迷いや葛藤を抱え易くなる可能性がある一方で、将来の目標の決定に加え、目標の達成のための行動ができていくことによって自己有用感が高まり、ウェルビーイングの向上につながっていることが推察できる。また、将来に対するイメージを形成するための土台には「客観的な自己評価」が不可欠であるといえるため、自己を的確に把握する機会としての評価活動（自己評価・他者評価・相互評価）の重要性が明らかになったといえる。専門職としての職業・勤労のあり様をイメージできる状況が目標をより確かに捉えることになり、評価活動によって成長の実感と自己有用感の高まりを期待することができる。また、自己有用感が対的なものであることを考慮すると、社会的な経験としての他者・相互評価の役割を無視することはできない。

結 論

今回の中学生及び大学生の調査結果から、キャリア意識が高ければウェルビーイングが高まるという単純な構造ではないこと、また、各授業のつながりや自身の学びや成長を正確に評価できる機会があることがより確かなキャリア意識の形成につながることを示唆された。中学生の職業的発達課題として挙げられている「自己理解と自己有用感の獲得」や「進路計画の立案と暫定的選択」は、自己評価によって可視化することが重要であり、それが職業的発達に影響を及ぼすことがわかった。一方、大学生における調査結果からも評価活動の重要性が明らかになり「これまでもある程度うまくやってきた」あるいは、「これから起こる可能性のある困難に対してうまくやっていける」という自己有用感がキャリア意識の高まり、ひいてはウェルビーイングに影響を与えていることが示唆された。

湯口¹⁴⁾は「キャリアには、生涯をかけて納得のいく人生を過ごすことへの、個人に向けた「自分らしさへ

の問い」が存在している」と指摘している。「納得のいく人生を過ごすこと」ができていくのかどうかは、評価の有する機能で把握することになる。つまり、「自分らしさへの問い」は、本来持っている「夢や希望（＝目標）」と「現在の自分」を照らし合わせることで得られるものである。これによって、自分として次にどこに向かっていくべきなのか、何をすべきなのかを思考することになり、それが「自分らしさへの問い」へのアプローチとなる。この問いとアプローチの明確化、あるいは、評価のプロセスで得られる自己有用感が、特に修学段階にある学習者にとっては修学意欲につながるものになる。キャリアについて考えること、あるいは意識することは、修学意欲に影響するとともに、ここで評価機能が果たす役割は小さくない（図1）。

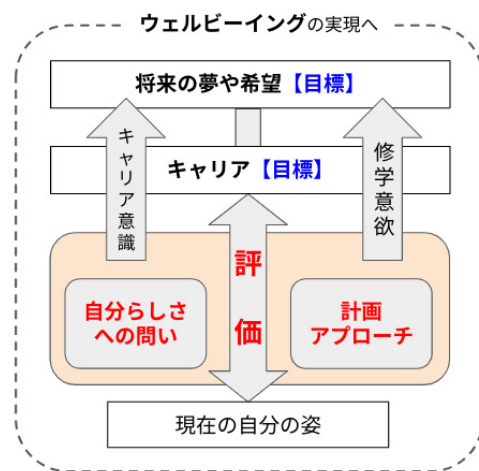


図1 評価を軸とした3要素の関連

本学子ども教育学科では、2022年度の調査結果を2023年度入学生の初年次教育の科目等の授業内容に反映させたことにより、学生の学ぶ姿勢や意欲に積極性、主体性が見られるようになった。この背景には、初年次教育であるFA演習や、免許資格取得にむけた学習の基盤を作る保育実習指導ⅠA、小学校実習指導といった科目で、自身の学習状況を逐次把握し、次にどうすべきかを見定めるための科目固有のルーブリックを活用したことが要因の1つに挙げられる。さらに、専門職意識を可視化するワーク等の継続的な実施や、履修科目間のつながりをイメージするワークの実施等の成果の表れがあると予測できる。特に、ルーブリックに関しては、第1回、第5回、第10回、第15回の授業を目処に、各授業の「目指すゴールに対して、現在地を把握するためのものさし」であるルーブリックを定期的を実施し、自己評価とともに個人面談等で教員と共に振り返るといった他者からの評価にも触れる機会を設けることにより、自分の今持っている力をより正確に把握することにつながった。自身の能力を正確に評価できることは、次に自分が何をすべきかといった自己課題を

把握し、その解決法を探るプロセスで自身の学習活動をコントロールすることができるようになるため、有効である。また、自己評価は、大学生にとっても難しいものであることから、自己評価の過程における教員による丁寧な関わりや支援が不可欠になる。自信を失いかけている学生に対しては、図1に示すように「夢」という大きな目標に向かうことは自己課題に向き合うことでもあり困難を伴うのは当然であることを伝えるとともに、着実にキャリアに対して前進している証であるから諦めずに「希望」を持って突き進んでいこうと励ましてきた。この繰り返しにより、学生が夢を見失わずに、キャリア意識を保ちながら修学意欲の向上を図ることができたのではないだろうか。

今後も、学習者の職業的発達課題を見極めながらキャリア支援を行っていくとともに、修学に向けた学びの質を保証して学習者が高い意欲を持ちながら学業に取り組めるよう、教職協働を通して目指していきたい。大学の学生課保健担当としては、今回の調査により明らかになった「キャリアについて考えること」の重要性を踏まえ、学生自身が「自分自身の目標やなりたいたい姿」に目を向けられるよう、ウェルビーイングの実現に向けたサポートを心がけていきたい。さらに、「自己に対する肯定的なイメージ」を育むことができるよう、学生のポジティブな変化を見逃さず、自らの成長を実感できるよう丁寧に関わっていきたい。

今回の報告では調査結果の一部を取り上げるにとどまったが、これからも本調査を継続し、キャリア意識や修学意欲を高めるための支援や授業内容・方法の改善・再構築を図っていくことにより、本研究で得られた結果を還元し、学生のウェルビーイングの向上に寄与していきたい。

謝辞

本研究は、令和4年度薫英研究費の助成を受け実施したものである。本研究の趣旨をご理解頂き、アンケート調査へご協力頂きました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1 国立教育政策研究所. PISA2015年調査国際結果報告書 生徒の well-being(生徒の「健やかさ・幸福度」). OECD. 2017, 4
- 2 中央教育審議会. 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申). 2021:4
- 3 中央教育審議会. 次期教育振興基本計画について(答申). 2023:7,9
- 4 中央教育審議会. 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申). 2011:16
- 5 国立教育政策研究所生徒指導研究センター. 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書). 2002:40-48
- 6 吉村英. 女子大学生の友人関係、キャリア意識および大学生生活自己効力感が学業成績、大学生生活満足度および幸福感に与える影響. 発達教育学研究. 2018;12:1-14
- 7 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至. 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究. 2003;74(3):276-281
- 8 浦上昌則. 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学教育學部紀要. 教育心理学科. 1995;42:115-126
- 9 下山晴彦. 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究. 1986;34(1):20-30
- 10 信藤佳奈. 大学生のキャリア意識が主観的幸福感に及ぼす影響について. 関西福祉科学大学卒業論文. 2019:2-19
- 11 外山美樹・長峯聖人. 人は困難な目標にどう対処すべきか? - 困難な目標への対処方略尺度を作成して -. 心理学研究. 2022;92(6):551
- 12 前野隆司. ディストピア禍の新・幸福論. プレジデント社. 2022, 120-140
- 13 フィールデン(野呂)育未・岡田雅樹. 幼稚園教諭の専門職意識を形成する要素の可視化-実習関連科目の改善に向けた取り組み-. 大阪人間科学大学紀要. 2023;22:15-17
- 14 湯口恭子. 大学生のキャリア探索とレジリエンス-効果的なキャリア支援のために-. 関西大学大学院心理学研究科博士学位論文. 2021:12

The Effect of Career Awareness on Well-being

— Investigation to Improve Academic Interest —

Miwako YOKOJIMA, MA,^{*†} Kana SHINDO,^{**} Ikumi FIELDEN-NORO, MA,^{*}
Shigeyuki DOHI, MA^{*}

Objectives : To focus on the different stages of professional development of junior high school students and university students and to clarify the relationship between career awareness and willingness to study, based on the status of goal setting for the future. We will also examine how wellbeing is related to this.

Methods : The survey was conducted among students at private junior high schools in Osaka Prefecture and university students at Osaka University of Human Sciences.

Results : The results of a survey of junior high school students revealed that it is important to visualize through self-assessment the acquisition of self-understanding and a sense of self-usefulness, as well as the formulation of career plans and provisional choices. On the other hand, the results of a survey of university students revealed that effective assessment activities increase their sense of self-worth, which influences their career awareness and motivation to study.

Conclusions : These findings reveal that the structure in which higher career awareness leads to higher well-being is not a simple one. It was also suggested that having the opportunity to relate study subjects and accurately evaluate one's own learning and growth leads to the formation of a more solid career awareness. We will continue to conduct this survey to improve and reconstruct support and class contents and methods to enhance career awareness and motivation to study, and to contribute to the improvement of students' wellbeing.

Key Words : Well-being, Career awareness, Motivation to study, Follow-up survey, Assessment

(Received on Oct. 19, 2023, Accepted on Dec. 8, 2023)

* Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences.

** Student Affairs Office, Student Support Center, Osaka University of Human Sciences.

[†] Corresponding author : Department of Child Education, Faculty of Human Sciences, Osaka University of Human Sciences. 1-4-1, Shojaku, Settsu, Osaka 566-8501, Japan
E-mail : m-yokojima@kun.ohs.ac.jp